

## 1章 日本赤軍の前史として 日本赤軍が生まれた時代（1960年代 - 70年）

### 1 「プロレタリア国際主義と組織された暴力」に導かれて

私自身の国際連帯の問題意識は、60年代の日本のベトナム反戦運動、ことに、ブントの「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の路線によって導かれた。このスローガンは、67年の10.8闘争の総括と、同時頃ボリビアで戦死した国際主義者チェ・ゲバラの闘いの教訓として提出された。

日本は、朝鮮戦争特需によって敗戦復興の基盤をえ、60年日米安保条約、65年日韓条約の締結を経て高度成長を遂げ、米国の同盟のもとに、アジアにおける経済侵略を開始していた時代にあたる。

これまでの侵略戦争の反省や“平和と民主主義”、“大学の自治”を権力の側から破壊し、「期待される人間像」や産業にふさわしいマスプロ教育など、新しい転換を支配の側はめざしていた。そして、これまでの「平和と民主主義」は、権力の支配秩序として強権的抑圧の言葉にとって代えられたにもかかわらず、旧態然とした社会党や共産党のイニシャチブでは、時代を切り開きえないと、反戦、基地闘争や学費値上げ反対を、学生運動を中心に、60年安保以降、新しい闘い方を求めて急進化していった。

67年10月8日佐藤首相の訪ベトナム（南ベトナムなどを訪問）阻止羽田闘争は、これまでの何千のデモ行進が阻まれて来たことから、ヘルメットと角材の「街頭実力闘争」として、新しいスタイルの闘いを開始した。この非妥協な運動戦・街頭戦が、それ以降の学生運動の大衆的な先鋭化のさきがけとなるほど、これまでの大衆的なデモのあり方、街頭行動の抗議活動を転換させた。国境を越えた武装闘争に身を捧げ、「2つ3つのベトナムを！」と呼び掛けたチェ・ゲバラの精神をひきうけ、この10.8闘争の転換、新しい時代を实践するものとして、「プロレタリア国際主義と組織された暴力の前進へ！」と語られた。

ブントは、「社共」にかわる直接行動主義の革命的左翼の闘いを通して、イニシャチブを執ることを求めている。10.8以降、「ベトナム反戦」から、「プロレタリア国際主義」へ、「大衆実力闘争」から「組織された暴力」へと主体的な闘い方の転換をめざして以降の闘いを担った。

当時の社会状況は、ベトナム侵略戦争に反対する国民の反戦平和の意識は強く、市民の共感をえて闘っていた時代である。ベトナム反戦、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争、王子野戦病院開設阻止闘争、三里塚闘争、学費闘争、自治会運動、大学自主管理、全共闘運動へと、大衆的に学生運動が高揚していく局面にあった。市民はベ平連、青年は反戦青年委員会、学生は全共闘と、広い裾野の中で闘われた。当時67年10.8羽田闘争にデモの一員として参加した私自身は、理論的に問題意識を持っていたわけではないが、これからのベトナム反戦の闘いと、機動隊の暴力に対して、「プロレタリア国際主義と組織された暴力」のスローガンに導かれて闘うことは、必然のように感じられた。

「プロレタリア国際主義と組織された暴力」は、当時の国際的なベトナム反戦の闘いのひろがりの中で、世界的に連鎖しており、時代のイメージを反映したスローガンとしてあった。

## 2 1968年「国際反帝反戦集会」と新しい理論「8.3論文」

1968年8月3日、アメリカ（ブラック・パンサー、SNCC、SDS）、ドイツ（SDS）、フランス（JCR）などが参加して「国際反帝反戦集会」が開催された。この集会に、ブントから提出したものが、いわゆる「8.3論文」である。

「この論文で初めて、世界党 世界赤軍 世界プロレタリア統一戦線という陣型・路線が正面きって主張されたのであり、その後『過渡期世界論』としてまとめあげられた主張の骨格を提出したものであった。」（『世界革命戦争への飛翔』より）この論文では、時代を「現代は、ロシア革命以降、資本主義から社会主義への過渡にある『過渡期世界』である」ととらえた。過渡期世界においては、これまでのようにプロレタリアートが帝国主義の動向に規定される受動的な位置から、逆に、プロレタリアートがブルジョア階級を規定する方向へ転位した能動性の中で闘うという時代にあると主張し、「攻撃型階級闘争」「攻撃の戦略・戦術」を、その特徴としてあげた。

この時代認識論は、世界史の中に自らの役割、位置を求めている「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の闘いにより国際主義的な闘いの時代的意味を付与した。その限りにおいて開かれた国際連帯を内包していた。しかし、この認識は、ロシア革命以降の拓かれた人類史を、どう社会革命として切り開くかというテーゼとしては向かわず、もっぱら運動論、特に党の軍事問題に一面化されていく傾向を孕んでいた。

そのイニシャチブは後の赤軍派誕生へとひきつがれていくことになる。ブントは、この「8.3論文」の国際主義的な地平をふまえて、ちょうど起こった衝撃的な68年8月のチェコへのソ連ワルシャワ軍の介入占領制圧に対する抗議、ベトナム反戦防衛庁突入闘争、そして69年4.28沖縄闘争へと闘って行った。その過程で、ブント内では、運動のより先鋭化、戦術の高度化をめぐる論争がつづき、軍事問題と党組織のあり方をめぐって、いくつもの分化が起きていった。

8.3集会は、ベ平連を中心とした国際集会（京都）や、ヒロシマ、ナガサキの反戦反核平和集会参加者たちの中から、呼応して生みだされたものだった。国際的なニューレフト、または、アメリカ国内の武装実力闘争のグループや、ブラックパンサー、ドイツ社会主義学生同盟など、左派勢力を中心に、組織や個人が8.3集会に集まった。初の試みとなったブント自身のこの集会へのイニシャチブは、国際的な党的な勢力との共同行動を求めるリアリティの出発点となった。また、私自身にも学生として、書記局の手伝いにすぎなかったが、直に国際主義・国際連帯に触れ、世界の人々と共に立ち、闘うという大きなインパクトを与えられた。私自身の世界への飛翔の原点といえる。「攻撃型」とか「非妥協性」とかの形容詞に彩られた闘いであった。

## 3 赤軍派の結成と問題

67年10.8以降ブント内のより急進的戦術と方法を求める党内論争は、時代を反映してつづいていた。

軍事の役割を重視し、組織を改組して、武装の問題を中心に据えること、それにふさわしい指導部形成を求めて、指導部批判をくり返した人々が、その党内闘争の敗北の結果として、「赤軍派」として登場した。赤軍派は、誕生の初めからその形成において、間違いを孕んで出発したわけである。当初は、「国際主義と組織された暴力」の闘争を発展させる指導を問題として、党の革命を求めた。ことに、1969年4月28日沖縄闘争での戦術方法をめぐる論争を経て、「4.28 闘争の敗北の総括」を主張した部分が、党の武装、党の革命を求めた頃から、「赤軍派フラク」(註・「派」という呼称がフラク [fraction の短略語] を意味するが、「赤軍派」として党組織となったので、当時のブントの党内のフラクという意味で、ここでは赤軍派フラクと呼ぶ)が形成された。「共産主義がイデオロギーの問題から、プロレタリアートの現実の運動 主体性の展開へと不断に転じて行く今日では、前衛党もまたこの道を通してしか形成することはできない。まさに思想としての反スターリン主義を、現実的に止揚することが問われていたのである。『党の革命』とは、この点に凝縮されている。我々が、69年の党内闘争を通して、到達し、逢着したのは、まさにこの点であった」(『世界革命への飛翔』239頁)

ブントは、1968年の8回大会で混乱し、10.8以降の闘いを、どのように発展させていくか方針を統一しえずにいた。関西ブントの一部、のちに赤軍派フラクを形成していく部分は、4.28敗北という総括から、「秋の前段階武装蜂起」によって突破しようと「攻撃型階級闘争論」をもって、「党内党」的な活動を開始し、中央との矛盾をつくりだした。フラク内では、「現代革命・・・」と呼ばれる文章による意志一致が行なわれた。後の赤軍派の理論内容として公表される文章である。

赤軍派フラクの指導部批判に対するブントの中央指導部からの赤軍派フラクに対する査問に対抗し、先制的な攻撃としていわゆる「7.6事件」が起こった。この「7.6事件」とは、赤軍派フラクが、党内民主主義のルールにはずれて、政治局指導部への自己批判と辞任要求を求める形で、暴力的に指導部に迫ったことにはじまる。この過程で権力の介入によって、当時破防法の指名手配中のブントの仏(さらぎ)議長を逮捕させてしまった事件である。赤軍派の暴行によって負傷していたために、議長は権力に捕らえられてしまった。またその直後、同日、今度は赤軍派フラクの者たちもまた、のちの叛旗、情況派を名乗る者たちに逆襲され拉致された。こうして7.6事件を境にブント内のさまざまな傾向をもつフラクは分裂・対立していくことになったのである。

7.6事件は、赤軍派フラクには一切の弁明の余地無く、自己批判すべき事件であった。そして赤軍派フラクは、自己批判を提起した。

「我々は、以下の行為と、そこに内在する基本的傾向を確認し、自己批判する。

- 一、同盟議長以下、同志に対してリンチを加えたこと。
- 一、同盟議長を結果としてであれ、権力に売り渡す事態を招いたこと。
- 一、以上の行為をもって、同盟を破防法攻撃と非革命的分裂の危機に、一時的にせよ追い込んだこと。
- 一、7.6以降、その行為と惹起された事態の意味を理解しえず、我々の弱さと、党内闘争の敗北的事態を排外主義的に合理化するかのよう、いくつかの“別党”的“分派”的行動を行なったこと。」(「同盟への我々の自己批判」、1969年『赤軍 NO.8』)

自らが「無政府的、解党主義的、自然発生的」であったことを自己批判として提出し、同盟への復帰を求めた。赤軍派フラクとしては、自己批判しつつも、だからといってブントの赤軍派フラク批判が正しい

のではないという考えに基づいていた。しかし、ブント中央指導部は、自己批判を認めず、8月上旬の中央委員会において、赤軍派フラクの解体と統制委員会の査問を決めた。9回大会は、8月にその議事で行なわれたことで、赤軍派フラクの者は参加せず、8月下旬、「共産主義者同盟赤軍派結成総会」を行なった。この総会は、「別党ではなく、『分派』として自己規定し、ブントの統一をめざす」ものとして行なわれた。その後、赤軍派フラクのみならず、ブント自身が分化し、かつてのブントの力量と影響力を失っていくことになる。赤軍派フラク自身も党内闘争のあやまちの結果として、別党「赤軍派」として活動しはじめることになった。

当初赤軍派フラク自身ブントの中で、党の革命をめざしていた。その根拠は「武装」、「軍事を担う党の改組」の問題であった。ブント自身が運動的突出を指導性として、その自然成長に組織建設を委ねていた分、運動の先鋭化を主張する赤軍派フラクに揺さぶられた。ブント自身の持っていた大衆運動・社会運動の基盤や組織化は、「武装闘争」、「軍事を担い得る党の革命」に一面化されていった。これまでの市民運動のベ平連や労働運動、反戦青年委員会、野党・社会党などとの反体制的な共同の部分よりも、運動の飛躍を唱える赤軍派フラクに逆規定されていった。「恒常的武装闘争」「R G」「党の武装」など軍事を担い得る組織改組へと、ブント自身さまざまなフラクの連合体のような内実を持っていた分、その後分解していくことになった。

時代は、高度経済成長を経て、それに伴い産業構造の再編によって転換がはかられ、消費水準の変化多様化していった時代である。大学の自治、自主管理を求め、産学共同路線に反対し、学園闘争はひきつづき先鋭化しながら、全国全共闘運動のひろがりが高揚の中にあった。1969年には、ストに突入した学校は、165校、全大学の43%、50万の学生や市民が10.21国際反戦デーに参加する時代であった。68、69年の10.21国際反戦デーの一日の逮捕者が1500人をこえていることが記録された時代である。党派活動は、街頭闘争（ベトナム反戦、三里塚など）学園闘争と相互に影響を受け、与えつつすすむ中で、ブントの分解過程として、赤軍派が誕生したわけである。

赤軍派は、当時の全国全共闘日比谷集会（69年9月5日、178大学26,000人）に初めて登場し、秋の前段階蜂起を主張し、世界革命戦争の防御から、対峙に向かう世界党、世界赤軍建設と革命戦争を主張した。

その頃の学生運動は、“大言壮語”ともいえるそれらの主張が学園や喫茶店で語られる日常性があった（決して社会性があったわけではないが）、学生運動は学費値上げや自治、学館管理など共通した条件にたたされていたため、個別の学園の枠を越えて、全国的に連携し合い大きく高揚していった。高度成長に伴う産業構造の再編は、学問の意義を産学共同に切り縮められ、学費値上げや管理などが露骨であった。学生の抗議、占拠、自主管理は、機動隊の導入によって学園の自治が踏みにじられる事態となった。社会をどう変革していくのかが、闘う側も問われていたが、権力側もまた日本の未来像を出せずにいた。

69年東大闘争安田講堂攻防では、300余名が逮捕された。当時の国立大75校中68校、公立大34校中18校、私立大270校中79校がバリケードストライキで闘う状況であった。69年4月、権力は初めて破防法を中核派とブントの指導部に適用した。弾圧を受けながらも、運動の社会的ひろがりや、人々が社会全体の世直しを求めていたと言えるだろう。三島由紀夫が危機感をもって70年行動を起こしたように、社

会の激動は渦中であっては、真剣な死活問題としてあった。

自らのエリートとしての位置を問う「自己否定論」や、全共闘運動から公害・環境問題など、大学の学問と社会運動や地域変革と結びつく条件がたくさん生まれていた。地域の自治と大学の自治が社会変革運動として、これまでの国会の野党的な政治と、ちがう形で動きはじめていた。

しかし当時の赤軍派フラクは「プロレタリア国際主義と組織された暴力」を「世界」と「軍事」へと純化し、社会運動や学園闘争からも召還し、「前段階蜂起」など、武装闘争によって牽引するという主観的願望のもとにあった。

「軍事闘争」が、他の大衆的で地道な運動よりも価値があるように考えられていた。確かに、自らが自己犠牲、捨て石になろうとか、我々こそが世界革命を切り拓くというロマンに満ちて尊大な夢に賭けていた。そうした考えが一般的に赤軍派の全体を制していた。科学や理性より情熱の論理化された結晶のように結集していった。私自身もそのうちの一人であった。こうした無自覚な傲慢な考えを「使命感」としてとらえていた。「非妥協性」に革命的価値を求めていた。

当時ブント指導部も、赤軍派の突出に対して方向性は持ちえず、組織統制でしか応えられなかった。当時、ブントは、「中央権力闘争とマッセストの結合として、ソビエト運動の常態化をもって、70年安保闘争を闘う」としていた。職場・学園と結合した運動戦のそれである。ブント自身が「国際主義と組織された暴力」から世界党、世界同時革命を主張し、実践上は運動的突出を指導性としてきたために、“軍事”に替わるパラダイムを提出できずにいた。当時の学生運動の全国化に影響を受け、また、影響を与えながら、赤軍派は、運動的突出に一面化して、闘いにつき進むことになった。

赤軍派として、個別に進むことで競争のようにより純化して、権力の弾圧にさらされた。軍事に一面化して行くことで、赤軍派は、自ら大衆的再生産構造を持ち得ず、党としてではなく戦闘団化し、権力の集中的な弾圧の中で解体していく根拠を、当初から形成していくことになった。これまで「大衆闘争機関」の実体でしかなかったブントの質が、武装闘争を担い、権力との攻防が先鋭化して初めて、組織の質として問われたのである。思想的にも物質的にも、敵に打ち勝つ組織をどうつくるのか？それが、後に赤軍派から「共産主義化」として連合赤軍へとひきつがれる内容でもあり、また、日本赤軍も「組織のあり方」として後に問われる問題でもある。

当時の私自身は、ブントの先輩の人脈の契機から赤軍派フラクとのつながりが生まれたにすぎず、闘う情熱を持っていたにすぎなかった。党派活動も組織化や理論などまったく未経験なままに、赤軍派フラクに入っていた。そして、7.6事件以降起こってしまったことに責任を取るという赤軍派フラクに意気を感じ、さらに結集した。いまさら逃げるのは卑怯ではないかと、敗北や困難をひきうけるべし、と心情的で傲慢を内包した「使命感」を持って、赤軍派の一員となっていた。

#### 4 前段階蜂起の敗北から国際根拠地論へ

当時の赤軍派指導部の「主要な問題というのは、人民のエネルギーと、それから党の指導とどう結合するかということが現在の基本的な問題。人民の運動と党の闘いがどう結合すべきか？党建設、階級形成の



中心結合環として、軍隊を位置付ける」「蜂起そのものは、占拠闘争にとどまっちゃ駄目という風に考えているが、前段階蜂起というのは、権力奪取を直接的な目的とはしないということであり、なぜ前段階と付けているかと言えば、世界革命戦争を現実化していくという意味で、前段階であり、その前段階の蜂起の持っている意味というのは、プロレタリアートが権力闘争を展開するというところだけにとどまらないで、プロとブルの階級対立を鮮明化させ、体制間戦争へと傾斜していこうとするブルジョアジーの攻撃に対して、階級闘争を対置させ、その階級闘争の下に、全世界の人民を統合していくということが、前段階蜂起の基本問題だと思う」（「世界革命戦争への飛翔」より）などの発言に表われているように、軍事的な赤軍派の先行的突出によって攻防を流動化させる、つまり、それ以上の方向は、観念的な形でしか描かれていない。

「われわれの69年秋の基本の一つは、『革命的敗北主義』であった」と主張しているように、秋に「デモよりは大きく、蜂起よりは小さい」時代の中で、党の軍隊として、赤軍建設に一切を掛け、前段階蜂起を闘う中で、新しい流動を形成しようとしたが、前段で、69年10.21闘争前に逮捕・敗北した。その後、「東京戦争」や「大阪戦争」と言いつつ大衆市街戦を目指したが、交番や警察攻撃しか担えなかった。さらに大菩薩峠で「首相官邸占拠」を目指す主力の仲間も逮捕された。赤軍派は「秋の前段階蜂起」に一切の結合の根拠があった分、展望を問われた。秋の蜂起の敗北の総括として、「国際根拠地論」が提出された。「赤軍派は、敗北したとはいえ、秋の闘いは、革命的敗北主義によって、赤軍派を一国的反帝最左派から、世界革命主体へと変革させた」と自己肯定的に総括した。そして、

- ・世界プロレタリアートの成熟構造に対し、三ブロックに分断されている現状を止揚していく
- ・先進国のプロの世界性、攻撃性にもかかわらず、受動型革命にある一国主義などの「労働者国家」の止揚は、世界的党派闘争として展開されるべし
- ・その闘いは、世界プロレタリアートの団結にとどまらず、世界党のもとに、「世界戦争戦略」として、味方の「世界革命根拠地」建設という、国境を越えた闘いでなければならない
- ・60年代党派は、「自国帝国主義打倒」が国際主義と主張しているが、世界革命根拠地創出と世界革命戦争の攻勢展開の世界的戦術の貫徹の必要
- ・「革命戦争の一国的防衛か世界的攻勢か」「一国的プロ独か世界的プロ独か」

などの、現時点から見ると、「大言壮語」の主観的な願望に基づいて「国際根拠地論」を定立した。「国際根拠地論」は大菩薩峠事件以前から語られていたが、その事件後本格化した。（註・大菩薩峠事件 69年11月、軍事訓練に集結した赤軍派53名が大菩薩峠の宿泊の山荘で一斉検挙された。）

位置付けは、国際根拠地は「世界プロ独創出の党派闘争を媒介としつつ、世界党形成の根拠地として味方の世界革命根拠地、そこでの世界赤軍の創設、新たな生産の組織化を行ない、帝国主義を主戦場とする正規軍戦を担うという国境を越えた戦争戦略」としてあったが、これは肥大化した観念的な論理であり、実体は、権力の攻撃に対して、他の革命の支援を受けつつ、日本革命の展望を見つけようとする防御戦であった。人民に還る、人民の中で闘うという発想の欠如がはなはだしい実態であった。その一つは、よど号ハイジャックとして実現した。

「北朝鮮で何をするのかという疑義が起こると思うんですけども、要するに、労働者国家で、国際根拠地をつくり上げていき、日本、あるいは、アメリカという現在の反革命の心臓部での闘いを結合させる

ということが具体的な任務としてあった」「69年秋の大菩薩峠での軍事訓練の失敗の現実的な総括から、敵の制圧下で軍事訓練をやるのが果たして可能なかどうか、現在の階級闘争は、先進国の心臓部が決定的焦点で、闘いを心臓部で展開するには、国際根拠地との結合と、この場合ストレートに労働者国家というのではないんですが、プロレタリアートが権力を掌握している、プロレタリアートが支配階級になっているところでの力と、先進国心臓部における力の結合が基本的な鍵になっている」「(「世界革命の飛翔」121頁)のような問題意識としてあった。

しかし、よど号での脱出は何らその国際根拠地論の展望は出せず、逆に国家の壁に対して「秋の蜂起」に戻る条件も方法もなく、ハイジャックが行なわれていたという現実と直面した。その結果、次ぎの国際根拠地形成として、国家ではなく闘いの場を根拠地とすべしという考えの中で、世界性を持ったアメリカのプロレタリアートとの共同とか、日米蜂起や第三世界との結合の問題意識が生まれてきた。すでに当初からの主要メンバーは獄中にあった。

## 5 なぜパレスチナなのか

「国際根拠地論」の路線実現のためのよど号ハイジャックは、出発と共に、継承性を持てる何らかが存在していなかったことが判明した。また、主観的願望に基づいており、後は、出発した人々の意志を待つしかない状態であった。そのことから、国際根拠地のあり方そのものが問われた。スターリニスト国家権力の壁に阻まれて、北朝鮮では、国際根拠地は形成しえない。むしろ、闘いの過渡にある解放と革命の戦場をこそ、根拠地とすべきであると。

その頃、69、70年、パレスチナ解放闘争は、シビアーな闘いの連続であり、ゲリラ戦も多く闘われ、日本でも報じられるようになった。ベトナム解放運動とちがって、それまでアラブとイスラエルの戦争など日本では、国家と国家の戦争の側面として伝えられていた。そのため人民連帯の運動は、日本には当時存在していなかった。

しかし、パレスチナ問題に限られた情報から明らかになるにつれて、パレスチナ問題こそが世界の矛盾の環であり、世界革命の要の位置にあるととらえた。イスラエルのパレスチナ占領によって民族解放闘争の闘いを強いられ、解放を実現することが、シオニズムという、いわば帝国主義本国の闘いの質を同時に要求されている戦場であるためであった。ここでは、パレスチナ問題の発生や20世紀英仏の植民地問題やシオニズム、ユダヤ人問題は省略するが、パレスチナ問題の解決こそ人民運動として、国際根拠地、世界党形成の位置にあるのでは、という問題意識を持つようになった。つまり、当時のベトナム、パレスチナ解放運動の国際的局面と、日本で弾圧敗北の中から活路を見出そうとしていた赤軍派の「国際根拠地論」が結びつく条件がそこに生まれた。といっても、当時の私たちの主観的願望にすぎないのだが。

当時パレスチナに参加し得る主体は、パレスチナ側の求めに応じて、医者、看護婦、技術者など、国際的にも、ことに欧州を中心としてニューレフトの連帯がひろがっていた。ユダヤ人問題を乗り越えるパレスチナ連帯は、ユダヤ人への原罪意識の形成されたドイツや欧州では、画期であった。

日本では、武装闘争をめざす他の潮流の一つとして、パレスチナにボランティア志願を可能とする流れとして、いわゆる京大パルチザングループや人脈がパレスチナに関わるようになった。「パルチザン」の考え方は、「全共闘運動の自然発生性を解体し、自己否定の全共闘大衆運動を、遊撃軍団パルチザン5人組形成とパルチザン戦闘の体制化」を主張していた。大衆的武装によって、来るべき地域ソヴィエト運動と結びつく準備をはかるという考えによる。自発的団結とゲリラ戦の戦闘団的な闘い方などを模索していた武装闘争を実現するという使命感を持っていた。赤軍派が集中的に弾圧された時代、赤軍派的な“党”中心意識からは自由な戦闘団形態によるパルチザンは、死角からのさまざまな「武装闘争」を担っている部分も存在していた。

当時、国際主義に目を向ける契機は、ブントであれ、赤軍派やパルチザングループであれ、ベトナム反戦闘争、そしてチェ・ゲバラの呼びかけた「二つ、三つ、さらに多くのベトナムを！」の世界への呼応の志であった。その志はパレスチナへと向かった。